

令和3年度第1回大船渡市総合教育会議会議録

1 日 時

令和3年10月22日（金） 午後3時00分から午後4時40分まで

2 場 所

大船渡市役所 教育委員会会議室

3 出席者

(構成員) 市長 戸田公明、教育長 小松伸也、教育委員 柏崎正明、教育委員 村谷志保、
教育委員 清水恵子

(事務局) 教育次長 遠藤和枝、学校教育課長 佐藤真、教育総務課課長補佐 金野幸恵、
学校統合推進室主幹 武田貴子、学校教育課管理係長 佐々木英紀、教育研究
所指導係長 鈴木恒希

3 報 告

コミュニティ・スクールについて

4 意見交換

GIGAスクール構想の推進について

5 会議の概要

(教育次長)

- ・ただいまから令和3年度第1回大船渡市総合教育会議を開会する。開会にあたり、戸田市長からあいさつをお願いします。

(市長)

- ・お忙しい中お集まりいただき、また、日頃の市政へのご理解とご協力に感謝する。

この総合教育会議の役割は主に三つあり、一つ目は教育行政の大綱の策定、二つ目は教育の条件整備など重点的に構ずべき施策、本日のテーマがまさにこれに該当する。三つ目は児童生徒の生命・身体の保護と緊急の場合に構ずべき措置となる。教育委員会と市長部局でより良い教育行政を目指していくための意見交換の場が総合教育会議の主な趣旨である。

1年数ヶ月にわたるコロナ禍により、様々な面で影響を受けたかと思うが、万全を期して教育活動を進める必要がある。本日は、重要な二つのテーマが議題となる。一つは学校のICT化であるGIGAスクール構想について、もう一つは令和4年度導入に向けて進めているコミュニティ・スクールについてである。

この場でのご意見を今後の施策に反映させていただくこととなる。どうか忌憚のないご意見を賜りたい。

(教育次長)

- ・次第3 報告 コミュニティ・スクールについて、学校教育課長から報告をお願いします。

(学校教育課長)

- ・資料等に基づき報告する。

(教育次長)

- ・ただ今の報告について、質問・意見等を求める。

(柏崎委員)

- ・どの学校も、地域に開かれた特色ある学校づくりを目指している。学校統合により、第一中学校、東朋中学校の学区が広範囲となった。家庭や地域社会との連携を深めていくことがより求められる。
- ・今後、コミュニティ・スクールの導入により、保護者、地域の方、学校活動に携わる方など幅広い関係者の方々が学校運営に参画することとなる。学校の内外で取り組む様々な活動が広く理解され、一体的に推進されていくことが期待される。

(学校教育課長)

- ・今までも学校は地域と共に歩んできた。学校統合により、学区が拡大した中学校では、学区内の小学校数も増え、連携が難しい部分はあるだろう。
- ・今こそ、地域を知るチャンスであり、学校を知ってもらうチャンスでもある。このコミュニティ・スクールを通じて、地域の良さや学校の子どもたちの活躍を発信しあうことで連携を深めていきたい。

(村谷委員)

- ・最初はとても難しく感じたが、末崎のわかめ栽培や吉浜のスネカなど、既に取り組んでいることが多い。既存の活動や繋がりを活用しながら、徐々に拡大していけば円滑に進むだろう。

(学校教育課長)

- ・様々な活動を通し、地域の方に関わっていただいている。今後、更に絆を強め、協力を得ながら地域と共に進めていきたい。

(柏崎委員)

- ・これまでの教育振興運動で培われた地域と学校の連携を活かし、より充実したものに発展させていくことが求められる。教育振興運動ではなく、なぜコミュニティ・スクールが必要なのかを保護者や地域の方々に周知していくことが大切だろう。
- ・今年の2月に開催された研修会では市内の学校や地区公民館関係者が参加し、学びを深めた。今後も制度を周知し、令和4年度からのコミュニティ・スクール設置に向けた機運の醸成を図っていくことが大事である。

(学校教育課長)

- ・今まで教育振興運動として活動してきた部分とコミュニティ・スクールとなることで変わる部分について時間をかけ、丁寧に説明しながら地域の協力を得ていきたい。

(清水委員)

- ・耳なじみがなくても出来そうだと思うれば取り組みやすい。周知の際は、既に取り組んでいる活動の紹介があるといい。

(学校教育課長)

- ・地域からの協力について、校報等で地域に発信している。各学校で教育活動に違いがあ

るため、情報の発信にはそれぞれの特性に応じた工夫が必要だと考えている。教育委員会でも学校を支援する。

(教育長)

- ・現在、事務局で各学校と協議し、学校運営協議会設置に向けて動いている。
- ・子どもたちは大船渡市の未来を託す人材である。地域の良さを知り、地域を愛し、地域のために何かやれることはないかと動く子を、ふるさと愛を育成していきたい。
- ・これからのスタートとなる。前段階で地域の方々にしっかりと説明し、PTAにも十分に理解していただき、協力を得ながら進めていきたい。

(市長)

- ・好きこそものの上手なれと言うが、様々なことに接していくうちに、自然に好きだと感じ、好きなものに集中するようになる。作家、野球選手、音楽家、科学者、プロフェッショナルになる人は好きだからその道を選んでいる。何が好きかを自覚しやすくなる自由な雰囲気的大事にし、出る杭を育てることが大切である。これからの時代は専門性が問われる。
- ・日本は今まで画一的な教育をしてきたが、これからは想像力を伸ばし、考える力を養っていく教育となる。そういう方向性を意識した学校運営が必要となるだろう。
- ・「未来を作り出し、生きていく力」、すごく深い言葉である。この姿を目指し、小学生・中学生を方向づけていくことは相当考えなければならない難しい取組だと思う。しっかり考えようと言いたい。

(学校教育課長)

- ・以前から教育の分野では「生きる力」という言葉が出てきている。言葉は抽象的だが、スモールステップを積み重ねて培っていく力だと思う。
- ・農業活動、漁業活動など、地域の様々なことを学ぶ過程で、個性や自由な発想を牽引していく働きをICTが担うのだろう。子どもたちの様々な可能性を引き出す教育活動をしていけたらと思う。

(市長)

- ・子どもたちが興味を抱くものに大人も関心を持たなければならない。大人に成長していく過程で身の周りにある何かに興味を惹かれ、それにより成長していくこともある。子どもたちに地域のことを教える、あるいは見て、体験してもらうことは大事なことだと思う。

(教育次長)

- ・今年度、コミュニティ・スクールについて積極的に地域と保護者に説明していく。この場で進捗状況など随時報告していきたい。

(市長)

- ・学校運営協議会の委員数は何人程度を考えているのか。

(学校教育課長)

- ・10名前後、10名から15名を考えている。

(市長)

- ・保護者代表、地域学校協働活動推進員、企業・組織、接続校の管理職等とある。

(教育長)

- ・学区が大きい第一中学校は地区関係者だけで6人になる。逆に、小学校と中学校で委員

の方が重複してしまう地区もある。現在、委員の方を選定しているところだ。

(市長)

- ・市内に北里大学の研究所がある。身近な大学を知ってもらうことも刺激になるだろう。自分が進学しようと思ったきっかけは、ほんの些細で単純な理由だったが、みんな、そうではないだろうか。何かに触発されたりするものだと思う。

(教育長)

- ・大体 10 年毎に学習指導要領が改訂され、その時代の課題がテーマとなる。日本の現状を鑑み、テーマとなったのが「生きる力」である。今年度から中学校は新学習指導要領が実際にスタートしており、来年度は高校でスタートする。コミュニティ・スクールもその一環となる。

(市長)

- ・「STEAMS」、今まで以上に意識してほしい言葉である。Science (科学)、Technology (技術)、Engineering (工学)、Art (美術・教養)、Mathematics (数学)、Sports (スポーツ)、様々なものがある。スチームと言えば蒸気だ。産業革命を蒸気機関車が牽引したが、今はSTEAMSという言葉がおそらく世の中を牽引していく。我々が直面している課題を解決し、常に導いていくことだろう。
- ・グローバルノートから気になる教育分野の指標を抜き出した。日本の大学進学率(4年制大学)は世界で14位、6割程度で決して高いとは言えない。大学院への進学率は世界で29位である。大学で生きる力が生まれるわけではないが、これだけ科学技術が発達していると進学して最先端のものを学ぶことは必要だろう。海外留学をしている学生数は世界で38位、国際化と言うには低い数字である。まだまだ頑張らなくてはならないことがわかる。
- ・我々が担当しているのは、小学生、中学生である。高校生以上になると我々の手を離れるが、橋渡し役として子どもたちのチャレンジを見守り育てることは大事だと感じている。

(教育長)

- ・学習指導要領改訂の中心に総合的な探求が位置付けられた。市長のイメージを共有しながら、子どもたちを各々の分野で伸ばしていくため、義務教育課程を担う市教育委員会として各学校を主導していかなければならないと思う。子どもたちの興味と関心を、志を高くもつような形で進めていきたい。

(市長)

- ・小学校、中学校の教育は世界トップクラスである。だが、東京大学の世界ランキングは56番目、トップクラスではなくなる。これが今の日本の実態である。高校になると受験体制となり、例えば私立文系を選択すると数学を勉強しなくなる。このような偏った教育では強い子にはならないだろう。別の方向に働きかける必要があることを意識しておきたい。

(教育次長)

- ・コミュニティ・スクールについて、他に意見がないことを確認する。
- ・次第4 意見交換 GIGAスクール構想の推進について、学校教育課長から説明をお願いします。

(学校教育課長)

- ・資料等に基づき説明する。

(教育次長)

- ・ただ今の説明について、質問・意見等を求める。

(柏崎委員)

- ・タブレット端末が一人に一台整備されることにより、子どもたちの学びの幅が広がっていくと思う。課題として、ネットの安全利用、有害情報への適切な対応、情報モラル教育の充実等が求められる。決してタブレット端末がいじめの温床とならないように、基本的なルールをしっかりと学び、取り組むことがとても大切だと思う。

(学校教育課長)

- ・情報モラル教育の育成は非常に重要なところである。便利な分、危険も孕んでいることを重々承知のうえ指導していきたい。

(教育長)

- ・利用にあたってのルールを学校に配布し、子どもたちに指導している。

(学校教育課長)

- ・教育委員会で通知している以外にも、各学校で随時指導している。

(柏崎委員)

- ・ICT支援員の配置を目指し、国では4校に1人の割合で財政措置を講じている。市内の小中学校には、いつから何名ぐらい配置する予定か。

(学校教育課長)

- ・まだ検討段階である。今は、教員への研修会等で効果的な活用を推進していきたい。

(柏崎委員)

- ・先生方の感想から大変な状況が読み取れる。出来るだけ先生方を支援する体制を教育委員会として考えた方が良い。

(教育次長)

- ・ICT支援員は教育委員会でも検討している。学校の状況も分かり、かつICTにも詳しい方となると人材的に難しい。その辺も調査しながら進めていきたい。

(村谷委員)

- ・タブレットが徐々に活用されていることが分かった。子どもたちの興味・関心を惹きつけるツールであるとともに、理解の助けになることを期待して見守っていきたい。
- ・働き方改革にもなると思うが、先生方の感想からは技術面は基より、心理的負担が大きく感じる。技術は習熟とともに徐々に上がっていくため、まずは苦手意識といった心理的な負担感を軽くすることが、タブレットの活用に繋がっていくのではないかと。
- ・バーチャルだけではなく、実体験の重要性も忘れないでほしい。

(学校教育課長)

- ・子どもたちは実際に体験したことを基にし、想像力豊かに活動していく。実体験は大事である。
- ・働き方改革にも繋がる。実際に使用しているアプリ「ロイロノート」は学校内でフォルダを共有できる。また、学校内に限らず市内でも共有できるフォルダになっている。

(鈴木係長)

- ・まだ市内でのフォルダ共有はしていない。

(学校教育課長)

- ・今後、市内での共有も検討し、共通の課題を全体で解決していきたい。

(清水委員)

- ・ICTはあくまでも生きていくためのツールだと思う。このツールを使い、子どもたちが技術を習得したことでどうなっていくのか。これがコミュニティ・スクールで市長が言及された目指す姿に結びついていくのではないか。
- ・ICTは情報を短時間で共有できるが、今度はそれを整理する技術が必要になる。
- ・大船渡市はどのような子どもに育てたいのか。ICT技術を使う目的がなければ、せっかくの技術も活かされない。グローバルな人を育てたいのか、大船渡市に貢献する人を育てたいのか、その目的によっても違ってくると思う。

(学校教育課長)

- ・目的は「生きる力」である。具体的なところは、これから検討していきたい。

(教育長)

- ・今までの教育は同じものを見て同じことを考えていたが、これからは多様な考え方を同時に見ることができる。大きな転機になるだろう。
- ・複数の小学校から一つの中学校に進学する場合、出身学校によりICT習熟に偏りがあると中学校との連携に支障をきたす恐れがある。技能的な習熟や能力の差が大きくなることも想定される。大卒でのカリキュラムが必要となってくるだろう。先行地区の事例も勉強しながら取り組みたい。

(清水委員)

- ・集まった情報から学んでいく思考過程を組んでいくのはタブレットではできない。その過程が重要である。

(学校教育課長)

- ・情報を検証し、目的と整合性を照らし合わせ、最終的にグループの合意を得ながら自分達の考えを形成し、プレゼン発表するということを繰り返し、子どもたちは成長していくと思う。今までは一斉での教え込みだった。なぜこうなるのか子どもたち同士が学ぶ、主体的な学びに変えていきたい。

(市長)

- ・デジタル庁により今後5年間で大きく変わり、仕事の進め方がデジタル化する。既に大企業のデジタル化は相当進んでいる。つまり、土俵が大きく変わるということだ。その新たな土俵の上で、将来子どもたちが生きていかななくてはいけない。生きていく力とは、こういう育みである。技術を習熟すれば、自ずと思考プロセスも則したものになっていく。
- ・ICT化には目的がない。やはり生きるための手段、自分の思考のための手段である。いかにうまく使いこなせるかが生きる力になっていくと思う。人間としての存在は変わらないが、人間としての行動の仕方が進化していく。進化のプロセスだと思う。
- ・市内にはICT分野の関係者が多数いる。ICT支援員として、テレワークセンターや地域おこし協力隊の方などの協力をいただくのも一案である。

(学校教育課長)

- ・たくさん意見をいただき、課題も見えて良かった。
- ・タブレットの技術を極めたとしても、手紙をおばあちゃんに出すとき、手書きの方が嬉しいだろうなと想像して書くことが大事だと思う。その目的に応じて、タブレットを使うか、手書きにするか、それを選択できる力を育てていきたい。

(市長)

- ・全て手書きにすれば心にしっくりくる。最高であるが、そうできない時もある。その場合は、宛名と自分の名前だけ手書きにするという方法もある。

(柏崎委員)

- ・テーマではないが、学校統合により、第一中学校、東朋中学校ともに、子どもたちがより良い環境の下で学習や部活動に励んでいる姿を見ることができた。また、様々な交流活動を通して、新たな人間関係を築いて、そしてお互いに切磋琢磨している姿を見ることができて嬉しく思う。

(教育次長)

- ・ほかに意見がないことを確認する。

(教育次長)

- ・以上をもって令和3年度第1回総合教育会議を終了する。